

学生の入学時におけるコンピテンシーと

1 年次英語能力試験結果の変容及び GPA に関する分析

石井 雅章（神田外語大学）

1. 本発表の目的と課題

本発表では、大学入学後に測定した学生のコンピテンシーに関する各能力と、1 年次における英語能力試験の成績変容の関係を分析する。TOEFL や TOEIC に代表される英語能力試験の成績は、当該試験の点数向上を目的とした学習方法及び学習行動によって変容すると考えられる。また、点数向上を目的とした学習方法及び学習行動は、当該時点での学生のコンピテンシーによって影響を受けると考えられる。

昨年の報告では、一部の対人関係に関わるコンピテンシー項目と英語能力試験の変容に相関が見られること、TOEIC と TOEFL との間では相関のあるコンピテンシー項目が異なることが明らかになったが、今回の報告では、昨年度入学生のデータを追加して、入学年次による違いの有無について分析を加える。また、英語能力試験の成績変容だけではなく、1 年次 GPA との相関について分析をおこなう。

2. 方法

本発表では、英語能力試験成績のデータとして下記のデータを用いた。

- ① 2015 年度及び 2016 年度の 1 年次生の入学時から 1 年間の TOEFL 及び TOEIC 成績
- ② 2015 年度及び 2016 年度の 1 年次生の一部を対象に実施した PROG テストの結果

本学では、入学時から卒業時までの TOEFL 及び TOEIC の成績データについて、全学生を対象に収集している。本発表では入学時のから 1 年間の成績データを元に、当該 1 年間での最高点と入学時の点数の差分を、英語能力試験の成績変容を示すデータとして利用した。¹

一方、PROG テストは、学生のリテラシー能力とコンピテンシー能力を総合的に測定するテストであり、本学では 2015 年度に 1 年次生全体の約 3 割強にあたる 253 名の学生が受検した。本報告では、その結果のなかからコンピテンシー能力のデータを用いた。

上記のデータを統合し、TOEIC もしくは TOEFL いずれかの成績変容データを有する学生のなかから PROG テストを受検した学生のデータを抽出した。

対象となった学生は、2015 年度 1 年生 206 名、2016 年度 1 年生 240 名の合計 446 名

¹ 分析に用いたデータセットの都合上、本予稿集に掲載した 2016 年度の 1 年次生の TOEFL 及び TOEIC の成績の変容は、1 年次 7 月時点での最高点と 1 年次修了時の最高点を比較したものである。口頭発表時には、2016 年入学生についても、入学時の得点と 1 年次修了時の最高点を比較したデータについても言及する。

である。また、TOEFL の 1 年次成績変容を有する対象学生は、2015 年度 1 年生 72 名、2016 年度 1 年生 52 名、TOEIC の 1 年次成績変容を有する対象学生は、2015 年度 1 年生 128 名、2016 年度 1 年生 187 名であった。

成績変容とコンピテンシー能力の関係については、コンピテンシー要素ごとに学生のレベルを 3 つの群 (high, middle, low) に分け、分散分析をおこない各群の成績変容の母平均に差があるかどうかについて検定をおこなった。また、分散分析は、TOEFL と TOEIC の成績変容それぞれに対しておこない、さらに TOEIC については、英語専攻学生と非英語学生とに分けておこなった。

GPA については、各年度 1 年生ともに 1 年次に履修したすべての科目の GP を平均したものをを用いた。

3. 結果

各分析結果については、表 1 にまとめたとおりである。

3.1 TOEFL

2015 年度 1 年次生の分析では、コンピテンシーの高さによる、1 年次における TOEFL 得点の変容の違いはほとんどみられなかったが、2016 年年度 1 年次生については複数のコンピテンシー要素において、TOEFL 得点変容の違いがみられた。とくに、「計画立案力」や「実践力」といった「対課題基礎力」に属するコンピテンシーについては、コンピテンシーが低い学生群の方が高い TOEFL 得点変容があることがわかった。

一方、「對自己基礎力」に属する「行動持続力」に関係するコンピテンシーについては、高いコンピテンシーを持つ学生群の方が、高い TOEFL 得点変容があることがわかった。

3.2 TOEIC

TOEIC については、2015 年度 1 年次生の分析では、「対人基礎力」のコンピテンシーの高さが、1 年次の成績変容に関係しているという結果が示されたが、2016 年度 1 年次生については同様の結果が示されず、「対課題基礎力」に属する「計画立案力」の低い学生群の方が、1 年次の TOEIC の成績変容が高いという結果となった。また、全体的に 1 年次 TOEIC 成績変容に関係するコンピテンシー要素の数が少ないことが明らかになった。

3.3 TOEIC (英語専攻学生)

TOEIC の成績変容及び PROG テストの結果を有する学生のうち英語専攻の学科に所属する学生数は、2015 年度は 48 名、2016 年度は 80 名であった。

英語専攻学生の学科に所属する学生については、2015 年度、2016 年度 1 年次生ともに TOEIC 成績変容に関係するコンピテンシー要素が少ないという結果が出た。専攻語の学科を問わない全体の結果と同様に、「対課題基礎力」に属する「計画立案力」の低い学生群の方が、1 年次の TOEIC の成績変容が高いという結果が出ている。

一方で、2015 年度 1 年次生において、TOEIC 成績変容に関係する数少ないコンピテンシー要素であった「気配り」が、2016 年度 1 年生においてはコンピテンシーが低い学生層の方が、TOEIC 成績変容が高いという結果を示している。

表1 各コンピテンシー能力レベル別の英語能力試験成績の変容及び1年次GPAに関する分散分析と多重比較の結果

大分類	中分類	小分類	GPA		TOEFL		TOEIC		TOEIC(英語専攻)		TOEIC(非英語専攻)	
			2015	2016	2015	2016	2015	2016	2015	2016	2015	2016
対人基礎力	(コンピテンシー全体)		**	middle > high ** low > high *	*	high > middle *						
		(対人基礎力全体)	*	middle > high *								
	親和力	(親和力全体)					**	middle > low * high > low *				
		親しみやすさ									**	high > low **
		気配り					**	high > low **	*	low > middle *	**	high > middle * high > low *
		対人興味、共感・受容									**	low > high **
		多様性理解			**	low < high **			*			
		人脈形成					*	high > low *			**	high > low **
	協働力	(協働力全体)					*	high > middle * high > low *				
		役割理解・連携行動									middle > high *	
		情報共有							*	middle > high * middle > low *		**
		相互支援										*
		相談・指導、他者の動機づけ	**	high > middle **			**	high > low *** middle > low *			*	
		(統率力全体)	**	low > high **								
	統率力	話し合う	*	*** low > middle ** low > high **	**	middle > low **					*	
		意見を主張する										
		建設的・創造的な対議										
		意見の調整、交渉、説得	***	middle > high ** low > high **			***	high > middle *** high > low **	*	high > low *	*	high > middle *
	対己基礎力	(対己基礎力全体)							middle > low *		middle > low *	
		感情制御力	(感情制御力全体)	***	high > low ***							
セルフアウェアネス												
ストレスコーピング			*	low > high **								
自信創出力		(自信創出力全体)					*	middle > high * middle > low *	*	middle > low *		
		独自性理解									*	middle > low *
		自己効力感、楽観性	*	middle > low **								
行動持続力		(行動持続力全体)	***	high > low ***	**	high > low *					**	high > low *
		主体的行動					**	high > middle ** high > low **				
		完璧	*	middle > high *			*	high > low *			*	
計画立案力		(計画立案力全体)	***	high > low *** middle > low **			***	middle > high *** low > high **	**	low > high *	**	low > high **
		目標設定									*	middle > low *
	シナリオ構築	**	high > low **	**	high > middle ** high > low ***			*	low > high *	*		
実践力	(実践力全体)	***	high > low *** middle > low **			**	middle > high **	*	high > middle ** high > low *		**	
	実践行動	***	high > low *** middle > low **					**	high > low **		**	
	修正・調整	***	high > low *** middle > low **	**	high > low *	*	middle > high *	high > low *			**	
	検証・改善	***	high > low ***			middle > low *					high > middle **	

* p<0.1, ** p<0.05, *** p<0.01
セル内上段は分散分析のp値
セル内中段・下段は多重比較の各群間のp値

3.4 TOEIC (非英語専攻学生)

TOEIC の成績変容及び PROG テストの結果を有する学生のうち非英語専攻の学科に所属する学生は、2015 年度 1 年次生が 80 名で、2016 年度 1 年次生が 85 名であった。

2015 年度 1 年次生においては、「対人基礎力」に属する「親和力」に関係するコンピテンシーや、「対課題基礎力」に属する「実行力」に関係するコンピテンシーの高さが、TOEIC 成績変容に大きく関係していたが、「親和力」に関係する「人脈形成」のコンピテンシーのみ、2016 年度 1 年次生についても同様の結果がみられた。一方で、「実行力」に関係するコンピテンシーの高さとの関係はみられなかった。

また、2016 年度 1 年次生については、「情報共有力」の中位グループを除いて、コンピテンシーの高さの違いによる 1 年次 TOEIC 成績変容がほとんど示されなかった。

3.5 GPA

本発表では、1年次 GPA とコンピテンシーとの関係についても分析してみた。その結果、2015 年度 1 年生と 2016 年度 1 年生との間で、GPA とコンピテンシーとの関係がかなり異なることが明らかになった。

2015 年度 1 年生については、「対課題基礎力」の高いグループの方が、GPA が高くなる傾向がみられたが、2016 年度 1 年生については、「対課題基礎力」に関わるコンピテンシーの高さではなく、「対人基礎力」及び「対自己基礎力」の一部が GPA の高さに関係していることが明らかになった。しかも、それらのコンピテンシー要素の多くは、コンピテンシーが低いグループの方が、GPA が高くなるという結果がみられた。

4. 考察

TOEIC については、2015 年度 1 年次生と 2016 年次 1 年度生の結果が大きく異なり、TOEIC 得点変容と関係するコンピテンシー要素の数自体が少ないということも特徴的である。

TOEFL については、行動持続力が高く、計画立案力や実践力が低い方が、高い TOEFL 得点変容を生み出していることから、ある種の「鈍感さ」を持って英語資格試験に関する学習を継続できる学生が、高い得点変容をもたらしていると考えられる。

今回、初めて分析をおこなった GPA については、2015 年度及び 2016 年度の 1 年次生ともに多様なコンピテンシー要素との関係があるという結果がみられたが、両年次生において共通のコンピテンシー要素がほとんどなく、現時点ではどのように結果を解釈すべきか判断がつかないというのが正直なところである。分析方法の見直しや、年次データの蓄積によって、さらなる分析が必要である。

【参考文献】

学校法人河合塾・株式会社リアセック監修、PROG 白書プロジェクト編 2015 『PROG 白書 2015』 学事出版

学校法人河合塾・株式会社リアセック 2015 『PROG の強化書』 (PROG 受検者向け解説書)